

カイコの栽培は朝鮮半島への交易路を通じて広がり、4 世紀までに日本に伝わった。身分を示す方法として、裕福な日本人は絹の着物を着ていた。江戸時代（1603 年 - 1867 年）は絹の需要が高く、日本の絹の多くは中国から輸入されていた。江戸時代を通して、国内の絹の生産量は着実に増加し、日本で生産された絹の量は 1800 年代に増加し続けたが、生産技術はほとんど機械化されないままだった。ほとんどの絹の生産は世帯ごとに行われた。自分のカイコを育て、手動の木でできた紡錘でカイコの繭を漣っていた。春と夏にカイコを育て、秋に絹を紡いだ。

フランスとイタリアで絹の生産は機械化され、絹織物業者はジャカード織機などの新しい発明と競争しなくてはならず、苦勞した。日本は政府が行った西洋との貿易規制によって孤立し続けたため、絹の生産技術は変わることはなかった。日本が西洋貿易のために開国することを余儀なくされたとき、日本の絹の生産は依然として家庭の様式を中心としていた。明治維新に文化が急速に変化する間に、絹工業は現代の群馬県と埼玉県を中心に、特に富岡地域周辺で近代化を始めた。